

〔第八回春陽会展覧会〕 記録 ①

・〔美術の春 賑やかな上野〕 晩春から初夏へかけて美術界は陽春の桜時に比べると観衆の心もおちついて来るのと共に(東京)府美術館では洋画と日本画の競争的展覧会が開かれてゐる。洋画は春陽会第八回展で一般出品が三千七百余点に達したと云ふ隆盛さ、そのうちから厳選された二百余点と同人の力作、それに今年は碓伊之助氏の滞欧作と長谷川潔氏の版画に倉田白羊氏が郷里の山中に籠って制作三昧に入った山中諸作の三つが、各特別室を飾って人気を呼ぶ。

(\*) 碓伊之助 十六点／倉田白羊 十九点／長谷川潔 十四点。図録から

〔東京朝日新聞〕 四月二十日

「春陽会 搬入三千八百点 入選発表廿一日  
春季美術展の内最も注目される春陽会は廿二日から府美術館で開催されるが、十七日午後には締切迄に三千二百七十八点、地方出品五百九十四点、合計三千八百七十二点の搬入があつた。十八日から例の公開鑑別を行ひ、入選発表は廿一日の予定である。

今年の春陽会は滞佛中の長谷川潔氏の版画、碓伊之助氏の滞欧作及び

倉田白羊氏が信州で描いた山中作品が特別陳列となるので注目されている。」

▽雑記帳 「春陽会展に《人形のある静物》を出品した新入選の澁澤英雄氏は澁澤子の四男。田園都市や目黒蒲田電鉄その他会社の重役さん。和田英作氏に手ほどきを受け今は長谷川昇氏に師事。」

〔東京朝日新聞〕



\* 「…入選者の変わり種では、長谷川昇の弟子で田園都市、蒲田映画、帝劇等の重役 澁澤英雄氏(栄一子の四男)であるが、十年学んで初めて「静物」の一点が入選したことである。また同会研究所で二ヶ月ばかり習って入選した会社員もあつた。」

〔国民新聞〕 四月二十二日

▽手帖 「林倭衛、山本鼎両画伯が春陽会の会規に触れて百円ずつの罰金を食った▼といふいささか冗談めいて聞こえるが、この御両人芸術的良心が勝ちすぎたのか、それとも怠けたのか今度の展覧会(第八回展)に一点の出品もしないというので懲罰に処せられたわけだ▼ところがこの規約の提案者が林氏自らでしかも今度が第一回の違反とは飛んだ江藤新平だと、会員連喜ぶまいことか。」

〔東京朝日新聞〕 四月二十四日

⑤

・〔春陽会展を見る〕 最近どの展覧会も著しい出品の増加を来してゐるが、春陽会では本年は特に昭和賞(帝展)、二科、春陽会三団体で持ち回るY氏賞)の順番に相当するせゐあつてか一躍七百余点の激増を示して三千八百七十一点の搬入を見たが、このうち入選二百五十六点とは何んといつてもすばらしい厳選であつた。しかも多数の出品は例年に比し見るべきものが多く、いはゆる間に合わせの愚作が少ないために審査は非常に困難で、毎年三日位に終わる慣例を破つて、辛うじて四日間で喰いとめた、かういふ意外な支障のため廿二日の招待日に目録が間に合わないといふ状態。がこれも美術全盛期のよき反映と見るべきであらう。兎に角すばらしい逸品はないにしても、さすがに大ふるへにかけられただけの見ごたへある作品が揃つてゐる。変り種として目につくのは青山

(義雄)氏の「コンポジション」、横堀(角次郎)氏の「風景」に見る特色ある緑葉の表現法などである。出品を怠つた林(倭衛)、山本(鼎)二氏を除く会員諸氏の努力はすばらしいものがある。

足立氏の爽やかな風景数点、裕氏の十数点に及ぶ滞欧土産、長谷川昇氏の目も覚めるやうな綺麗な絵、木村莊八氏の唐人お吉に題材をとつた「歌妓支度」などは観者の足を留むるに足るものがある。また(小杉)未醒氏の日本画数点も、いかにも氏らしい特質が表はれてゐて面白い。「試馬」などには特にその面目が躍如としてゐる。最終室に飾つた木村、足立両氏の挿絵の陳列はともに最近の連載物を連想せしむる点において興味の深いものがある。(五月十四日迄 東京府美術館)

④

〔東京朝日新聞〕 四月二十三日

足立源一郎  
 《五月雨の穂高》



中川一政  
 《枯山》



〔春陽会第八回展出品作品〕

長谷川昇  
 《少女と仔犬》



木村荘八筆  
 《歌妓支度》(エスキス)



長谷川昇  
 《裸体(ラタイ)》



碓伊之助  
 《南仏の道》



小林徳三郎  
 《金魚を見る裸の子》



森田恒友  
 《春の池畔》



鬼頭甕二郎  
《早春》



「第八回春陽展」展評

小島善太郎「春陽会の所見」(上)

《毎春麗かな季節に開催を続けて、実に春陽会展、早や八回目数えることになった。今年の同展は、裕伊之助氏の滞欧特別陳列に、長谷川潔氏の滞欧版画、及び倉田白羊氏の山間制作等以上三つの特別陳列及び新進会員諸氏の力作等によって活気を見せてゐる。ただ遺憾なのは一般公募作が不相変小品で、小品が悪いと云うのではないが、どうも氣勢が揚らない。これは元氣な力に充ちてゐる若人に、より多くの抱負を持つて貰いたいものと思う。……》

〔時事新報〕 四月二十九日

小島善太郎「春陽会の所見」(下)

《…長谷川潔氏の特別陳列の版画十四点は、絹ざわりの様な繊細のものと、近くに寄つてその仕事を味へば作者の興意と知識を感知させて、確かに鑑賞の世界に導いて行く。一面智的で、様式は佛国十八世紀頃の版画に見る味ひと、丹念な技量と精緻とを持ったデリシアスな仕事である。君のこうした仕事は、これ迄の日本に余りなく、このヒントによつて又何ものかを日本にもたらすもたらすであらう。…

…三岸好太郎氏の本年の作は皆一段の進境を示し、怪奇な「マリオネット」など素朴な仕事で「読書少女」も深みと力がある。真田久吉氏は稍

老弱のきらひを覚え、昔日の抱負を呼び覚まして欲しい。坂口左右視氏の出品中「立木」に魅力が多い。横堀角次郎氏は稍黒く重き表現の中で「水無き川」など面白く見た。小穴隆一氏は才筆に過ぎ充実がないので作を軽くさせてゐる。…」

『時事新報』 四月三十日

豊田 豊「春陽会展批評」

⑦

《 四大家の洋画 先づここに源一郎、石井鶴三、森田恒友、中川一政といふ一団がる。彼らは皆日本画と洋画の両刀使いであるが、私は先づ最初に彼等の本格である洋画に就いて言葉を消費しなければならぬのだ。この四家は本来可なり先鋭な個性の持主でありながら、今年の画業は四家轡を揃えて、その先鋭さをうちに潜めて、妙に大人びて森閑とした、真面目臭った所謂大家藝の自若たるところを展開して居る。蓋し後進青年の模範たり得るに足るテキスト・ブック的表現である。しかし私は今年の槐樹社に於いて牧野虎雄君が、高間惣七君が、国画会に於いて梅原龍三郎君が、川島理一郎君が、上記四君と程等しい年齢の立置を以て、至極勇敢に跳躍し、澁刺として旋回してゐるのに比較して、この人達の仕事に百パーセントの賛頌を呈示することが出来ない。…》